

十住心批判に対する東密側の反論について

橋 本文子

弘法大師空海（七七四—八三五）は、十住心思想において天

台宗を第八住心に、華嚴宗を第九住心に位置づけている。これを宗是とする真言宗と、その配釈を到底受け入れられない天台宗の間で、論駁の応酬が長く続けられてきたことは周知の通りである。⁽¹⁾ 筆者は拙稿⁽²⁾において、東密側からの論駁書『十住遮難抄』⁽³⁾を扱ってきた。その『遮難抄』の構成の特色は、台密からの十住心批判に対し、『大疏』と『釈論』の二大論疏を軸に論点を分けてコンパクトに論駁している点が挙げられる。⁽⁴⁾ しかしこのような構成が誰からの影響かという点については従来不明であった。そこで本稿では、『遮難抄』に影響を与えた可能性のある実範（?—一一四四）の『大経要義鈔』をとり上げ、特に仏自証の扱いを中心に検討することにより、その影響を確認していきたい。⁽⁵⁾

まず実範における仏自証解釈だが、その前提として実範は、天台の義理は一乗を詮じてはいるが、仏自証の所説に権りが多いと断じる。その上で真言密教における仏自証を順次述べ

ていく。

なぜ真言密教は仏自証を説くと言えるのか、その自証とはどのようなものかという問いに、⁽⁶⁾ 実範は『菩提心論』の「於諸教中。闕而不言。」⁽⁷⁾を典拠として、唯だ真言密教のみが能くこの法を説くことができる、とする。他の余経等の説は、具さにそれを説明する暇がない。⁽⁸⁾ そして『性霊集』から、「勸縁疏」の恵果から空海への言葉、すなわち大覚を得ようと欲うならば諸仏自証の教えを学ぶべきであり、自証の教えとは『金剛頂経』の十万偈と、及び『大日経』十万偈であること⁽⁹⁾を告げる内容を引用する。これを基に実範は、だからこそ仏自証を説くことができるのは、真言密教のみであると明言する。さらに実範は、『大疏』の仏自証の解釈を引いて、やはり真言密教のみで仏自証を説くことを確認する。その論旨をまとめると以下のようなようになる。

自証の三菩提 如来自証の智体を得ること
 覚（諸）法本（初）不生 仏智の用をあらわす

本(初)不生⁽¹¹⁾一実の境界・中道

是処等⁽¹²⁾自証の三菩提が一切心地を出過し、(諸)法を本(初)不生と覺り、現れるところ⁽¹³⁾自智を証すところ⁽¹⁴⁾中道⁽¹⁵⁾四種言説・九種の心識の思議する所ではない

法仏の三密(自証) 四種言説は及ばない

曼荼の四身(自証) 九種の心識が縁じない

若離等⁽¹⁶⁾自証は、仏の加力を離れ、諸の因位の境界ではないことをあらわす

このように『大疏』の自証を解釈した後、実範はさらに空海の『二教論』・『即身義』から、真言の自証は等覺十地も及ばない境界であるとする箇所を引き、⁽¹²⁾自証を語りうるのが真言密教のみである論拠とし、同時に実範はこれら空海の理解も『大疏』と同じであることを示している。⁽¹³⁾

次に実範は『釈論』における自証解釈に注目する。そこで重要になるのが、『釈論』の五種の言説(①相言説②夢言説③妄執言説④無始言説⑤如義言説)と十箇心識(①眼識心②耳識心③鼻識心④舌識心⑤身識心⑥意識心⑦末那識心⑧阿梨耶識心⑨多一識心⑩一一識心)である。このうち⑤と⑩のみが真理を説きうる、と『釈論』自体で明記しており、⁽¹⁴⁾この記述を受け、実範は以下のように述べている。

問。疏主不見⁽¹⁵⁾彼論。如何疏意依⁽¹⁶⁾彼論耶。答。疏雖不見⁽¹⁷⁾彼。自存⁽¹⁸⁾真妄義。故義自当不相違⁽¹⁹⁾也。

ここでは、『大疏』の作者は『釈論』を見ていないとはいえず、

十住心批判に対する東密側の反論について(橋本)

自ら真・妄の義を擁しているので、その義に相違はないと述べる。相違はないとするこの記述は、実範の『大疏』と『釈論』の関連を窺う上で非常に興味深い。以下このような理解に基づき、『声字義』からまず九界は妄、仏界の文字は真実とすること、次に『釈論』五種言説と二種(つまり真と妄)の言説について、相言説・夢言説・妄執言説・無始言説は妄、如義言説のみが真実であること、さらに如来の自証は第五の言説・第十の心識においてよく説かれることなどを引証している。⁽¹⁶⁾その上で実範は「爾也。論言⁽¹⁷⁾真理者。是自証故。」として、『釈論』の真理それ自体が、自証故であると解釈する。

実範はここまでで、『釈論』の五種言説における⑤如義言説と、十箇の心量のなかの⑩一一識心こそが、真言密教における自証であると主張している。さらに実範は『声字義』の「十界具言語」⁽¹⁸⁾と、その解釈部分である「極真妄文字」⁽¹⁹⁾を引き、仏界の言語は真の文字にして如義言説であり、真言密教は自証を説くと証明する。⁽²⁰⁾ここで実範は『金剛頂経開題』から二文を引く。すなわち実知とは能達の智であり、実相とは所達の境であるという文と九種の心量の所縁ではなく、一一心の所縁のみであり、また一一心の所縁ではなく不二心の所証のみとする文である。⁽²¹⁾これを受けた実範は以下のように述べる。

意云。如来自証実相非九心所縁。第十心所縁。雖云第十心之所縁。而此心通二門不二。非二門一心所縁。不二門一心所縁耳。

つまり実範は、如来自証の実知・実相が九心の所縁ではなく、第十心の所縁であることを指しているとする。第十心の所縁とはいえ、それにもかかわらず、この心は二門・不二に通じ、二門は一心の所縁ではなく、不二門は一心の所縁のみを示しているとするのである。実範のこの解釈から、『釈論』の真如観を肯定的にとり上げることによって、空海の真如観と『釈論』で説かれる不二摩訶衍が、論理的に齟齬がないことを証明しようとする姿勢が垣間見える。

以上をまとめると、実範の解釈で注目すべきは『大疏』と『釈論』で述べられている仏自証は同意で、それぞれが自ずからそのように解釈しているとする点であろう。また実範がこのような『大疏』と『釈論』における仏自証の一致を、空海の『声字義』・『二教論』・『即身義』および『金剛頂経開題』を典拠に解釈している点も注目すべきである。なぜならば、『大疏』と『釈論』で説かれる仏自証の根拠が、両論共に『金剛頂経』に集約される故である。このことは、真言宗独自の教理をもって明確に答えようとする狙いが実範にあった可能性を示唆している。

また冒頭で述べた『遮難抄』の反駁の二部構成については、

今回検討した実範の一連の言及と着眼点が、内容的にも時代的にも直接の影響と考えられる。このことから、実範『大經要義鈔』が『遮難抄』に、多大な影響を与えた可能性が一段と濃厚になったとみてよいであろう。

以上の検討を踏まえ、今後は、実範の一連の解釈にさらに先駆思想があるか否か、また後世にこのような解釈の影響をうけた人物が存在するか否か検証したい。また本稿では扱わなかったが、信証の『大毘盧遮那経住心鈔』における第八・第九住心の解釈と実範の解釈は、かなり異なった方法をとっている。この点も含めてより詳細に検討を重ねることを今後の研究課題としたい。

- 1 獅子王円信「台東両密の教判史上に於ける論評」（『密教研究』三九、一九三〇年、四四―五八頁）、那須政隆「十住心の構成について」（『日本名僧論集』三、吉川弘文館、一九八二年、二八八―三二五頁）参照。
- 2 橋本文子「東密における『教時義』受容の一考察―特に「十住心の五失」について―」（『密教文化』二二七、以下橋本二〇〇六、二九―四八頁）、同「東密における『教時義』受容の一考察―『宝鑰』の二失」「『宝鑰』の三失」について」（『密教文化』二一九、以下橋本二〇〇七、一一―二四頁）参照。
- 3 大正七七、以下『遮難抄』。
- 4 橋本二〇〇六、二〇〇七。
- 5 光明山寺の実範は仁和寺の信証（一〇八六―一四二）とほ

ほ同時代に生存したが、光明山寺と仁和寺の具体的交流の実態は光明山寺が早くから廃寺になって上、手がかりになる資料が残っていないため不明である。本稿では扱わないが信証『大毘盧遮那経住心鈔』のように、安然の『教時問答』における十住心批判「『宝鑰』の二失」「『宝鑰』の三失」を引用し会通する様子は管見ではみられない。

- 6 大仏全四二、四一二頁上。
- 7 大正三二、五七二頁下。
- 8 大仏全四二、四一二頁上。
- 9 弘全三、五二八頁。
- 10 大正三九、五七九頁上—中。
- 11 大仏全四二、四一二頁下、及び大正六一、一頁上。
- 12 大正七七、三七五頁上、及び三八三頁上。
- 13 大仏全四二、四一三頁上。
- 14 大正三二、六〇六頁。
- 15 大仏全四二、四一三頁上。
- 16 大正七七、四〇二頁下。
- 17 大仏全四二、四一三頁下。
- 18 大正七七、四〇二頁中。
- 19 大正七七、四〇二頁中。
- 20 大仏全四二、四一三頁下。
- 21 大正六一、三頁中。
- 22 大仏全四二、四一三頁下。
- 23 『釈論』に述べられている仏自証（不二摩訶衍）の内実が、必ずしも空海および実範の考える自性法身の内実と同意ではないと予想される。拙稿（橋本二〇〇七）参照のこと。
- 24 実範は本稿で扱っている問題に対して、『金剛頂経開題』を

空海の経論解釈の確定的典拠として引用しているように見受けられる。このことにより『大疏』と『釈論』で説かれる仏自証の根拠を、両論共に『金剛頂経』によって空海は既に回答していたとする目論みが、実範にあったのではないかと予想できる。

- 25 堀池春峰『南都仏教史の研究下諸寺篇』（法蔵館、一九八二年）四二〇—四七二頁、苦米地誠一『平安真言密教の研究第二部平安期の真言教学と密教浄土教』（ノンブル社、二〇〇八年）二六九—三四八頁・六二三—六二四頁を参照。

〈キーワード〉 十住心、仏自証、実範、『大経要義鈔』

（国際仏教学大学院大学）

十住心批判に対する東密側の反論について（橋本）

一三七